

かゑらじと かねて思へハ 梓弓  
なき数に入る 名をぞとどむる  
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第16号

平成27年8月18日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

## 朱舜水、正成像賛・正行像賛成立の背景

### 江戸期、南朝研究をリードした光圀と綱紀

#### 正成を最初に評価した安東省菴

寛永19年(1642)、江戸から柳川に戻った安東省菴は、その翌年、「三忠伝」を著わした。

安東省菴の勤王思想を示す同著は、平重盛、藤原藤房、楠正成の三人の純忠を顕彰したもので、大日本史が世に出る前に、楠公の純忠を云うものは誰一人いない頃のことであった。

省菴は、慶安2年(1649)から5年間、京都で松永尺五に師事するが、同門に木下順庵、貝原益軒などがいた。天和元年(1681)、省菴は「日本史畧」を著わし、吉野朝(南朝)を官軍、北朝の将を賊と記した。

#### 楠公父子訣別図を描かせた前田綱紀

前田綱紀は、前田利家のひ孫で、家光(義祖父)、光圀(叔父)、保科正之(舅)等と姻戚をなす大名で、松永栄三、木下順庵、室鳩巢等、多くの学者・文人を抱え、舜水についても学ばせ、水戸学同様、舜水の大義名分論は加賀藩にも多大の影響を与えた。

万治3年(1660)、綱紀は狩野探幽に楠公父子訣別図を描かせ、舜水に乞うてその画に賛を依頼する。朱舜水が、安東省菴の三忠傳を百読し、正成像賛(第一首)を完成させるのは10年後の寛文10年(1670)のことである。

#### 大日本史、膨大な南朝調査活動

徳川光圀は、編年体で編纂された六国史に対し、中国正史編纂の正統的な形式である紀伝体の大日本史編纂を目指した。

延宝7年(1679)、南朝史料の調査活動に着手

するが、約10年を費やした調査は、京都、吉野、河内、和泉、九州、北陸に及び、正徳5年(1715)、徳川綱條によって「大日本史」が刊行される。

#### 省菴、益軒、宗淳、楠公の誠忠を論ず

貞享2年(1685)6月、水戸の儒臣佐々宗淳は、貝原益軒、安東省菴を相次いで訪れ、楠公の誠忠と顕彰を話題に論じ合い、江戸にもどり光圀に報告する。宗淳は、楠公碑建立の時、光圀によって現地建設奉行を命じられている。

#### 光圀、墓碑建立し、正成像賛刻む

光圀は、大日本史編纂のための南朝史料の調査活動が進んだ天和年間(1681～1683)には、南朝正統の信念に達し、元禄5年(1692)、正成が自刃したと伝わる湊川の地に、墓碑建立を命じる。

墓碑には、光圀自身の揮毫による「嗚呼忠臣楠子之墓」の文字を彫らせ、その碑陰に万治10年(1670)朱舜水が楠公父子訣別図のために作った正成像賛(第一首)の文章を、京都の書家、岡村元春に書かせ、彫らせた。

#### 舜水先生文集・大日本史を刊行

正徳5年(1715)、「大日本史」が、徳川綱條の手によって刊行され、同じく徳川光圀輯・徳川綱條校「舜水先生文集」が京兆書舗柳枝軒から刊行され、楠正成像ノ賛三首と楠正行像ノ賛が卷之十七に収録された。

朱舜水を取り巻く、光圀、綱紀、省菴、益軒、順庵等のネットワークによって、楠公父子の賛分が世に出ることになるのである。

(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)